朝倉屋

平安朝物語集

全

昭和三年十二月十二日　印刷
昭和三年十二月十五日　發行

有朋堂文庫
平安朝物語集　（非賣品）

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷兼發行者　三浦捷一

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

緒言

我邦古今の載籍、屢冠するに「物語」の名を以てし、其内容區々にして類を同じうせず。而して平安朝は、實に「物語」の始めて我が文學史上に現はれ來れる時代なり。此時代の「物語は、大凡分ちて二類となすべし。一は假作物語にして、竹取、源氏等之に屬し、一は事實に據りたる小話集にして、伊勢、大和等之に屬す。

本集題して平安朝物語集といふと雖も、其長篇大作は、別に之を刊行すべきを以て、爰には短篇數種を收めたり。

竹取物語は、古來我が小說の鼻祖として尊ばるゝ傳奇的物語にして、滑稽の裏に寓するに人情を以てし、頗る興味に饒なり。其作者を詳にせずと雖

も、延喜以前の作として信ぜらる。伊勢物語は、所謂歌物語の嚆矢にして、大和物語は之に繼ぎたるもの、共に古來歌人必讀の書として推重せらる。作者は何れも詳ならず。伊勢は業平の自記に後人の加筆せるものといふ說信に近かるべく、大和は、花山天皇在原滋春の二說共に信を置くに足らざれども、亦以て略其時代を推すべし。落窪物語は、源氏物語に先だてる人情小說にして、文章洗練、敍事緊密、平安朝に於ける名作の一たり。亦其作者を詳にせず。住吉物語は、原作早く亡び、今存せる者は、鎌倉時代の假托の作に過ぎずと雖も、今姑らく唐物語と共に附載す。唐物語は支那の故事を、なだらかなる邦文に書下したる者、亦鎌倉初期を下らざるべしと謂はる。

今回の覆刻に際して用ひたる本左の如し。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

竹取物語　流布本素本二册物。參照竹取物語解。

伊勢物語　流布本（定家卿自筆本に據ると稱するもの）。參照、玉選抄、拾穗抄、古意。

大和物語　大和物語首書。參照、直解。

落窪物語　古活字本。參照、上田秋成校訂本。

住吉物語　古活字本。參照、寶曆板流布本。

唐物語　清水濱臣校訂本。

本集の校訂につきては鳥野幸次、中村健兩氏を煩はしたること多し。特に記して謝意を表す。

大正二年二月　　校訂者　武笠三

目錄

竹取物語……一——四八
伊勢物語……四九——一三二
大和物語……一三三——二六六
上之卷……一三五
下之卷……二〇四
落窪物語……二六七——四九六
卷之一……二六七
卷之二……三三八

卷之三……四〇六
卷之四……四五一
住吉物語……四九七—五七〇
唐物語……五七一—六一六
平安朝物語集索引……六一七—六七〇

竹取物語

○かぐや姫おひたち

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造麿となむいひける。その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なゝめり」とて、手にうち入れて家に持て來ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。美しきこと限なし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁この子を見つけて後に、竹をとるに、節を隔ててよごとに、金ある竹を見つくること重りぬ。かくて翁やう〳〵豐になり行く。この兒やしなふ程に、すく〳〵と大になりまさる。三月許になる程に、よきほどなる人になりぬれば、髪上などさだして、髪上せさせ裳著す。帳の内よりも出さ

よごとに—節と節との間毎に

髪上—童形の放ち髪を上げ結ぶこと

裳著—裳を始めて着する祝

けうら—清ら

赫映姫—光彩赫耀たる姫の義

うちあげ遊ぶ—酒宴し遊ぶ

○つまどひ

よばひ—呼びの延音、呼び誘ひて

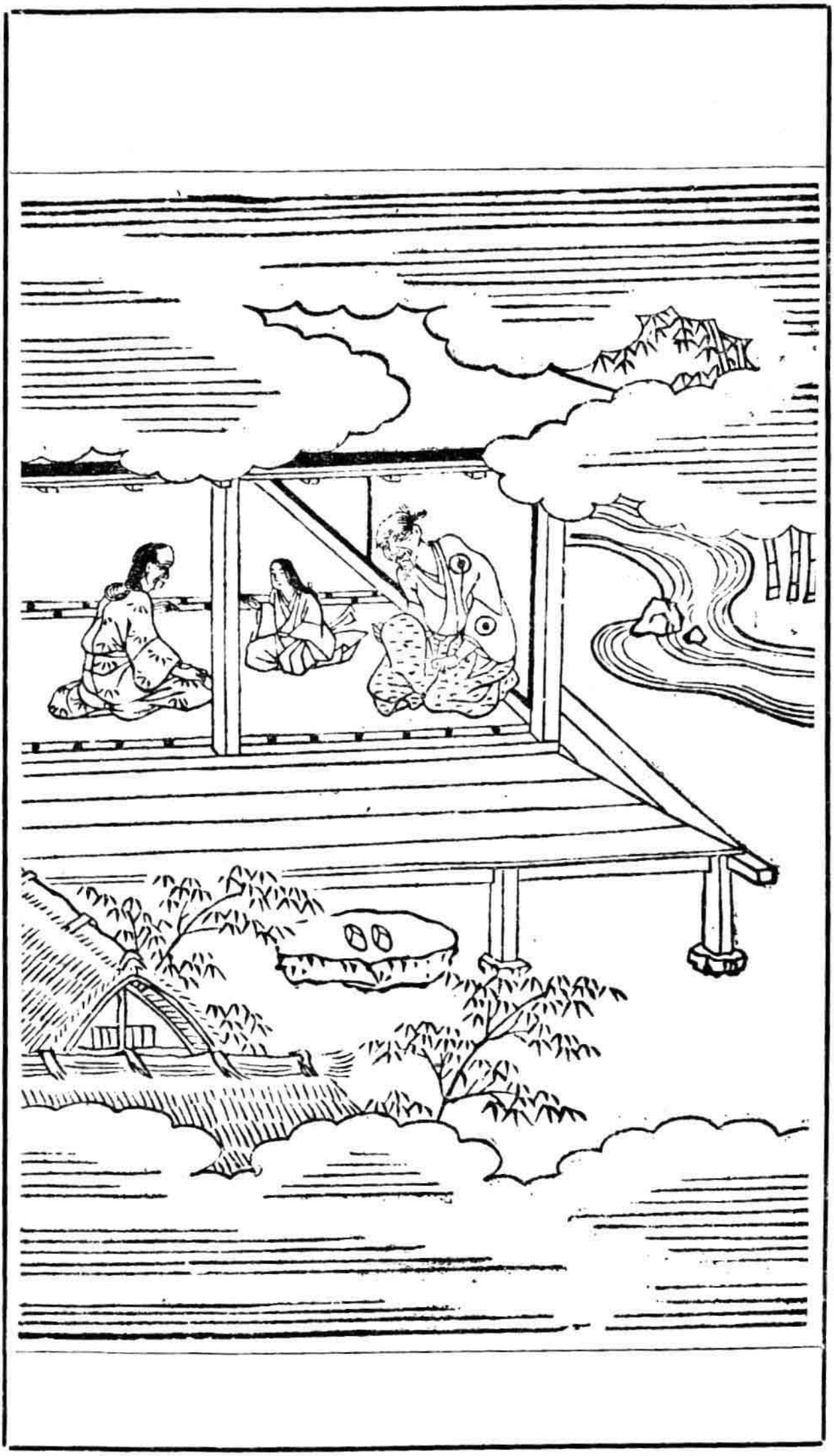
ず、いつきかしづき養ふ程に、この兒の容けうらなること世になく、家の内は暗き處なく光滿ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ、腹立たしきことも慰みけり。翁竹をとること久しくなりぬ。勢猛の者になりにけり。この子いと大になりぬれば、名をば三室戸齋部秋田を呼びてつけさす。秋田なよ竹の赫映姫とつけつ。此のほど三日うちあげ遊ぶ。萬の遊をぞしける。男女きらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

世界の男、貴なるも賤しきも、いかで、この赫映姫を得てしがな見てしがな、と音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも家の外にも居る人だに、容易く見るまじきものを、夜は安き寢もねず、闇の夜に出でても穴を抉り、こゝかしこより覗き垣間見まどひあへり。さる時よりなむ、よばひとはいひける。人の物ともせぬ處に惑ひありけども、何の驗あるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はむとて、いひ懸くれども、事ともせず。あた

情を通ずること
おろかなる—志淺き
わび歌—戀ひ侘びて詠める歌
さりとも—今は心強く斷るとも

りを離れぬ公達、夜を明し日を暮す人多かり。おろかなる人は、益なき歩行はよしなかりけりとて、來ずなりにけり。その中に猶いひけるは、色好といはるゝかぎり五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名、一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂、只この人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人々なりければ、赫映姫を見まほしうして、物も食はず思ひつゝ、かの家に行きて、たゝずみ歩きけれども、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返事もせず、わび歌など書きて遣れども、かへしもせず、效なしと思へども、十一月十二月の降りこほり、六月の照りはたゝくにもさはらず來けり。この人々、ある時は竹取を呼び出でて、「娘を我に給べ」と伏し拜み、手を擦り宣へど、「已がなさぬ子なれば、心にも從はずなむある」といひて、月日を過す。かゝれば、この人々家に歸りて物を思ひ、祈をし、願を立て、思やめむとすれども止むべくもあらず。さりとも遂に男合せざらむやは、と思ひて賴をかけたり。強に志を見え

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



門も廣く—一家繁昌にかうても—此儘獨身にても一人々々に—誰か一人に思の如くも云々—我が

ありく。これを見つけて、翁、赫映姫にいふやう、「我が子の佛變化の人と申しながら、こゝら大さまで養ひ奉る志疎ならず。翁の申さむこと聞き給ひてむや」といへば、赫映姫、「何事をか宣はむ事を承らざらむ。變化の者にて侍りけむ身とも知らぬ親とこそ思ひ奉れ」といへば、翁、「嬉しくも宣ふものかな」といふ。「翁年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす、女は男にあふことをす、その後なむ門も廣くなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさむ」。赫映姫のいはく、「なでふさる事かし侍らむ」といへば、「變化の人といふとも、女の身もち給へり。翁のあらむ限は、かうてもいまずかりなむかし。この人々の年月を經て、かうのみいましつゝ宣ふ事を思ひ定めて、一人々々にあひ奉り給ひね」といへば、赫映姫いはく、「よくもあらぬ容を、深き心も知らで、あだ心つきなば、後悔しき事もあるべきをと思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らではあひ難しとなむ思ふ」といふ。翁いはく、「思の如くも宣ふかな。そもく如何やうなる志あらむ人にかあはむと思す。かばかり志疎な

かれて思ひ居たる如く

うけつ一領承す

うそを吹き一口笛を吹く

らぬ人々にこそあゝめれ。」赫映姫のいはく、「何ばかりの深きをか見むといはむ。いさゝかの事なり。人の志ひとしかゝなり、いかでか中に劣勝は知らむ。五人の人の中にゆかしき物見せ給へらむに、御志勝りたりとて仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申し給へ」といふ。「よき事なり」とうけつ。日暮るゝ程、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或は唱歌をし、或はうそを吹き、扇をならしなどするに、翁出でていはく、「辱くもきたなげなる所に、年月を經てものし給ふ事、極りたるかしこまりを申す。翁の命けふ明日とも知らぬを、かく宣ふ君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ、と申せば、深き御心を知らでは、となむ申す。さ申すも理なり。いづれ劣勝おはしさまねば、ゆかしきもの見せ給へらむに、御志の程は見ゆべし、仕うまつらむ事は、それになむ定むべき、といふ。これよき事なり、人の恨もあるまじ」といへば、五人の人々も、「よき事なり」といへば、翁入りていふ。赫映姫、「石作皇子には、天竺に佛の御石の鉢といふ物あり、それをとりて賜へ」といふ。「車持皇子には、東の海に蓬萊といふ山あゝなり。そ

おいらかに云々―かゝる難題をかけむよりは何ぞ手短にこの邊へも寄り付くなとは言はぬ

○佛の御石の鉢したくみ―工夫

れに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。「今一人には、唐土にある火鼠の裘を賜へ。大伴大納言には、龍の首に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。石上中納言には、燕のもたる子安貝一つ取りて賜へ」といふ。翁、「難き事どもにこそあめれ、此國にある物にもあらず。かく難き事をばいかに申さむ」といふ。赫映姫、「何か難からむ」といへば、翁、「とまれかくまれ申さむ」とて、出でて、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」といへば、皇子達、上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩きそ、とやは宣はぬ」といひて、倦じて皆歸りぬ。

猶この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物も持て來ぬものかは、と思ひめぐらして、石作皇子は心のしたくみある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千萬里の程行きたりとも、いかでか取るべき、と思ひて、赫映姫の許には、今日なむ天竺へ石の鉢とりにまかる、と聞かせて、三年ばかり經て、大和國十市郡にある山寺に、

ひた黑—眞黑

面なき—面目なき

○蓬萊の玉の枝

賓頭盧の前なる鉢のひた黑に煤づきたるを取りて、錦の袋に入れて、作花の枝につけて、赫映姫の家にもて來て見せければ、赫映姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、

海山のみちにこころをつくしはてみいしの鉢のなみだながれき

赫映姫、光やあると見るに、螢ばかりの光だになし。

おく露のひかりをだにぞやどさまし小倉山にてなにもとめけむ

とて、かへし出すを、鉢を門に棄てて、この歌の返をす。

しら山にあへば光のうするかとはちを棄ててもたのまるるかな

とよみて入れたり。赫映姫返もせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、いひ煩ひて歸りぬ。かれ鉢を棄てて又いひけるよりぞ、面なきことをば、はぢを棄つとはいひける。

車持皇子は、心たばかりある人にて、公には、筑紫國に湯あみに罷らむ、とて、暇まう

おはしましぬと—遠く舟出こつと
内匠—禁裡の工匠
知らせ給ひつる云々—十六ヶ所の知行所
くど—窓、竈の後の穴
くどばくら(倉)の誤ならんとも言ふ
優曇華—經

して、赫映姫の家には、玉の枝とりになむまかる、といはせて下り給ふに、仕うまつるべき人々、みな難波まで御送しけり。皇子、「いと忍びて」と宣はせて、人も數多率ておはしまさず、近う仕うまつる限して出で給ひぬ。御おくりの人々、見奉り送りて歸りぬ。おはしましぬと人には見え給ひて、三月許ありて漕ぎ歸り給ひぬ。かねて事みな仰せたりければ、その時一の工匠なりける内匠六人を召しとりて　容易く人寄り來まじき家を作りて、構を三重にしこめて、工匠等を入れ給ひつゝ、皇子も同じ所にこもり給ひて、知らせ給ひつるかぎり十六所をかみにくどをあけて、玉の枝をつくり給ふ。赫映姫のたまふやうに、違はずつくり出でつ。いとかしこくたばかりて、難波に密にもて出でぬ。「船に乘りて歸り來にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しげなる樣して居給へり。迎に人おほく參りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひて持ちて參る。いつか聞きけむ、「車持皇子は、優曇華の花持ちてのぼり給へり」とのゝしりけり　これを赫映姫聞きて、我はこの皇子にまけぬべし、と胸つぶれて思ひけり。かゝる程に門を叩きて、「車持皇子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com